



子どもの願いが むすぶ秋

前川 良太

10月18日（土）小雨の時間帯もありましたが、なんとか運動会を園庭で行うことができました。先月号でも書きましたが、つばさの運動会は「今年の運動会は何をしたい？」と聞くところから始まります。これは単に「あなたの意見も反映しますよ」という参加型の企画ではなく、子ども自身の願いから創り上げられる運動会だということです。微妙な言い回しですが、ここには大きな違いがあります。

特に今年の4歳児の子どもたちは発想が豊かで、それでいて突飛な面もありました。子どもたちが今どんなことを望み、どんな日々を楽しんでいるのか。その思いをどう表現にしていけるのか——その点で大人もかなり苦戦をしました。

例えばゆうとくん。きのこが大好きで、「運動会はきのこ狩りをしたい」と言い出しました。

「園庭にきのこがあるのかな？」と問いかけると、本人も「きのこないやんか！」と不満そう（そりゃそうだ）。それでもあきらめきれず、リュックにきのこ図鑑を入れ、野山を歩くごっこ遊びが始まりました。そこからやり取りを重ねるうちに、最後は“お山帽子をかぶった友だち”の中に隠れた手作りの「ベニテングダケ」を探すという遊びになっていったのです。



現場を知らない人には、なんだかよくわからない遊びに見えるかもしれません。けれど、あの日のゆうとくんの実に楽しそうで満足げな表情は今も忘れられません。それは単に「きのこ探しできた」ことではなく、自分の楽しんでいることを友だちも一緒に楽しんでくれたからこそその表情だったのだと思います。というのも、友だちと一緒に遊びたくてもうまくいかずに葛藤していたゆうとくんが、この頃は実に楽しそうに関わる姿が見られるようになっているのです。そうした日々の延長線上にあった「きのこ探し」だからこそ、あの笑顔があったのではないのでしょうか。

5歳児とは違い、4歳児の子どもたちはまだ「自分がどうありたいか」を客観的に言葉にするのは難しい年齢です。言葉にならない内なる願いや表現を、一緒に拾い上げながら当日を迎えました。それぞれの子どもたちに、そんなエピソードや日常の積み重ねがあります。だからこそ、今年もまた子どもたち一人ひとりの姿が光る運動会になったのではないのでしょうか。

10月26日（日）、今年も「つばさ村」は大盛況でした。「地域への文化発信」と「父たちの活躍する背中を子どもにみせたい」そんな思いで始まったつばさ村も今年で8回を迎えました。カンガルーの会、ゴリラの会（OBを含む）、育む会、アトム保護者会、民生委員、校区福祉委員、WE WISH（職員有志の会）、そして卒園児たち。これほど多くの団体や人たちが手を取り合って一緒に創り上げる行事は、他にありません。

今年は縁日だけでなく、民生委員さんたちにご協力いただき「昔遊びコーナー」を企画していただきました。これは、行事の始まりの頃に込められたもう一つの目的の「子どもたちに昭和の古き良き遊びを伝えたい」という思いを、あらためて大切にしたいという願いから生まれた企画です。発足当初、子どもとしてこの行事を楽しんでいたOBっ子たちが、今ではお手伝いとして参加してくれています。地域の中で育った子どもたちが、次の担い手として関わってくれていること——それはまさに、私たちがめざしてきた「地域の拠点となる保育園づくり」のかたちそのものです。これからも、楽しみながら、みんなでこの行事を大切に育てていきたいと思っています。ご協力くださった皆さん、本当にありがとうございました。